様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　７日現在

機関番号：13901
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2007～2010
課題番号：19320096
研究課題名（和文）
ヘレニズム時代エジプト領域部における文化交流と二言語併用社会の研究
研究課題名（英文）
Cultural Contacts and Bilingualism in Hellenistic Egypt
研究代表者：
周藤　芳幸（　SUTO YOSHIYUKI　）
名古屋大学・文学研究科・教授
研究者番号：70252202

研究成果の概要（和文）：
中エジプトのザウィエト・スルタン古代採石場に残されているギリシア語とデモティックで表記されたグラフィティについて、現地での解読とテクストの内容の分析を行った結果、エジプト在地社会における二言語併用状況の変化の画期が前３世紀の中頃にあったこと、この時期から在地社会でもギリシア語の使用が卓越していく状況を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this research is to elucidate the process of acculturation in Hellenistic Egypt through the archaeological and epigraphic investigations at the open-air limestone quarry at Zawiet Sultan in Middle Egypt. The results of the research on the Greek and demotic graffiti discovered at the quarry clearly show that the linguistic hellenization made rapid progress in mid-third century BC.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2010 年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
総　計	9,200,000	2,760,000	11,960,000

研究分野：東地中海文化交流史
科研費の分科・細目：史学・史学一般
キーワード：文化交流史・ヘレニズム・プトレマイオス朝・採石場・グラフィティ

１．研究開始当初の背景

ヘレニズム時代エジプト領域部の文化変容をめぐる問題に関して、2003 年にプトレマイオス朝エジプトが専制的な中央集権国家であったとする通説を根底から批判する著書を公にした J.マニングは、「プトレマイオス朝エジプト史を研究する歴史家は、多くのテーマに関して時系列に沿った変化という歴史学のもっとも根本的な問題を扱うことができずにいる」と指摘していた。プトレマイオス朝の歴史が静態的なものとしてとらえられがちな理由は、何よりもその研究がギリシア語パピルス文書という単一の史料類型のみに過度に依存する形で進められてきたことと無関係ではない。プトレマイオス朝時代のパピルス文書は、空間的にはアレク

サンドリアから遠くはなれたファイユームや上エジプトに偏っており、年代的には前三世紀中頃と前二世紀末に集中している。そのため、これまで歴史家がパピルス文書からこの時代の社会を復元しようとする際、「エジプト社会の斉一性と停滞性」というメタナラティヴに頼らざるをえなかったのも当然であろう。明らかに、いまプトレマイオス朝史研究に求められているのは、パピルスから導かれた伝統的な社会像を批判的に検討するための新たな類型の史料を収集することであり、その点において、これまでほとんど行われてこなかったプトレマイオス朝の考古学は、将来の研究の進展に向けて大きな可能性を秘めているのである。

２．研究の目的

本研究では、このような申請時の問題意識のもとで、前３世紀に大量の石灰岩が採掘されていたザウィエト・スルタン採石場に残されたギリシア語及びデモティックで記されたグラフィティを考古学的に分析することにより、領域部における二言語併用状況とヘレニズム化（ギリシア語化）の様相を明らかにすることを目的とした。永続性を重んじた古代エジプト世界において、石材を用いた巨大モニュメントの建造は、王権や神官団にとって自らの権力を可視化するもっとも有効な手段であり、プトレマイオス朝の時代にも、エドフのホルス神殿を筆頭に、大規模な石造神殿が続々と建設されていた。また、首都アレクサンドリアの建設にも、膨大な石材が必要とされていたはずである。採石場のグラフィティは、そのような石材を切り出す作業の現場に残された貴重な未刊行一次史料であり、その解読と分析から浮かび上がる文化変容の一断面は、在地社会のヘレニズム現象の解明にも貴重な光を投げかけるものとなることが予想された。

３．研究の方法

ザウィエト・スルタン古代採石場は、カイロの南約 250 ㎞、中エジプト屈指の大都市ミニアからナイルを越える橋を渡り、東岸をさらに南へ 5 ㎞ほど進んだ地点で岩石砂漠の縁から北西に向かって延びる谷あいに広がっている。ミニアの対岸では、現在岩石砂漠上を開発して人工的な都市（新ミニア）の建設が進んでいるが、採石場はこの都市の外周を画する道路とナイルの沖積平野との間に位置している。このあたりの沖積平野には独特のドーム上の天井部を持つムスリムの墓が密集しており、ナイルと岩石砂漠が接するその南端部には、第３王朝時代の小規模なピラミッドなどで知られるザウィエト・スルタン（もしくはザウィエト・マエティンないしザウィエト・アムワト）遺跡が荒廃した集落跡をさらしている。この遺跡から北西方向を望むと、垂直の崖が不規則に切り立つ斜面が目にとまるが、これが古代の採石場である。

採石場は、岩石砂漠上の「巨像」の西側から沖積平野まで、長さ約１㎞にわたってほぼ南東に続いており、北西部が平坦に広がっているのに対して、南東部は深い峡谷状の地形を呈している。北西部には、石材を豆腐状に切り出そうとした痕跡などが残っているが、新ミニアに近いために大量の廃棄物が投下されており、古代のグラフィティはごく一部でしか確認することができない。これに対して、南東の峡谷状の部分では、複雑な採石状況を留める東側斜面と、水平方向への試掘の跡である横穴ギャラリーを中心に、グラフィティが比較的良好な状態で残っている。ただし、後代の採石によってプトレマイオス朝時代の採石跡が破壊されてしまったと考えられる箇所もあり、グラフィティは谷全体にわたって確認されるわけではなく、とりわけ谷

の東側では上部（ローマ時代の採石跡が広がる現地表面の直下）と底部（谷のもっとも低い部分）に集中している。

グラフィティの調査にあたっては、現在の景観の特徴に従って谷全体を複数のセクション（区）に分割し、それらに対してほぼ北から南にアルファベットによる名称を与えた。ただし、西側の横穴ギャラリーのように、調査の過程で新たにグラフィティの存在が明らかになった箇所については、後からセクション名を付したため、結果的にセクション名は必ずしも北から南という順序には完全には従っていない。これらのセクションを識別するにあたっては、基本的には一続きの壁、もしくは一つの横穴ギャラリーに、一つのセクション名を与えることとした。採石場にはいくつもの大きな自然の亀裂（フィッシャー）が走っており、古代の採石作業はその部分を避けるように進められたため、セクションを相互に隔てているのはこうして掘り残された部分であることが多い。セクションの設定はあくまで記録上の便宜のために行ったものであるが、調査の過程ではこれらが実際の採石作業の単位としても機能していたことが推測された。

４．研究成果

現地調査とデータ解析の結果、ザウィエト・スルタン古代採石場のグラフィティは、採石作業の管理を目的として、日付（治世年、月、日）、人名、作業量（幅×奥行×高さによる掘削量の容積）を壁や天井にメモ書きしたものであることが明らかになった。その時系列的な変化からは、以下の点を指摘することができる。第一に、採石場に残されたグラフィティからは、この採石場が少なくともプトレマイオス 2 世時代の末年から 4 世時代の初年に及ぶ 30 年あまりの間に操業していたことが判明した。実際の操業の開始時期がグラフィティの示す年代よりもどれだけ古いのかは不明であるが、谷の全体を通じて確実にこの期間から外れる年代を示す痕跡が乏しいことからは、概ねグラフィティの示す年代幅は操業期間と重なっているものと考えられる。

第二に、この間を通じて、グラフィティを記すための言語は、デモティック単独使用からデモティックとギリシア語の併用へ、ついでギリシア語単独使用へと推移したことが明らかになった。ザウィエト・スルタンでは、デモティック単独使用の段階があったことは状況証拠からの推測にとどまらざるをえないが、さらに南のデイル・アル＝バルシャでは、ベルギー隊によってデモティックだけが用いられた前 4 世紀の採石場が調査されている。朱線と文字によって採石場の作業を管理するアイディアは王朝時代に遡るものであるが、この伝統は前一千年紀に入っても在地の採石場で連綿と継承され、ヘレニズム時代にまで至ったものと考えられる。このように、ザウィエト・スルタン古代採石場のグラフィティは、採石場という在地社会の末端においても、前 3 世紀の半ばから後半にかけてギリシア語の使用が急速に進展したことを証拠立てている。そのプロセスの詳細は不明であるが、この変化を促進した要因の一つが、採石場における労働形態にあったことは確かであろう。上述したように、グラフィティに現れる人名には、セクションによって差異はあるものの、ギリシア系の名前とエジプト系の名前がともに含まれている。おそらく史料にラトモイ（石工）として現れる集団に相当すると考えられる彼らが、自ら手を下して採掘に携わる労働者だったのか、あるいはその区域の採掘作業の責任者だったのかは定かではない。しかし、グラフィティを二言語で併記する習慣が一定期間続いたこと自体

が、採石の現場において、ギリシア語とエジプト語をそれぞれの母語とする人々が共同して働いていた状況が現出していたことを如実に物語っている。在地社会へのギリシア語の浸透は、プトレマイオス朝による上からの政策などではなく、このような在地社会の状況から必然的に生じたものだったのである。それでは、採石場で働いていた彼らは、いったい何者だったのか。プトレマイオス朝時代の鉱山労働はしばしば戦争捕虜や囚人、奴隷などによって行われたとされているが、ロストフツェフも指摘するように、在地住民の生活圏に近い採石場では、そのような者たちの使用は一般的でなかったと考えられる。この点についても、採石場のグラフィティからは、きわめて興味深い仮説を導くことができる。これまでの調査によって、暫定的にではあるが、ザウィエト・スルタンでは月名を読み取ることのできるギリシア語のグラフィティが 108 点確認されている。その月ごとの分布を調べると、もっとも多いのはパウニ月とエペイフ月（およそ 7 月下旬から 9 月下旬）で、それぞれ 16 点ずつが見つかっている。これらの月に先行するパコン月にも 13 点、さらにその前のファルムーティ月にも 13 点が存在する。ところが、逆にこれらの月の直後にくるメソレ月のものは 5 点しかなく、その次のトト月にいたっては 1 点も見つかっていない。グラフィティに記された日付が採石の行われた日付であるという確実な証拠はないが、両者がほぼ対応するものであったとすると、採石場での作業は春先（テュビ月）から活発化してナイルの氾濫期にその頂点に達し、ナイルの水が引くと激減したことになる。このパタンは、いったい何を反映しているのであろうか。

もし採石作業が専門の石工集団によって行われていたのであれば、このような季節による大きな変動はありえないであろう。明らかに採石作業は農閑期にもっとも盛んに行われていたのであり、それはとりもなおさず採石場の労働者の少なくとも一部が在地のエジプト人農民やギリシア人入植者であったことを示唆しているのである。最後にザウィエト・スルタン古代採石場のグラフィティの史料価値を指摘することで、今後の研究への展望に代えたい。第一に、これらの史料は、これまで圧倒的にパピルスやオストラカに依拠する形で進められてきたヘレニズム時代のエジプト在地社会研究にとって、新たな情報源となることが期待される。とくに、二言語で併記されたグラフィティの年代がプトレマイオス 2 世の時代に重なることは、ゼノン文書に代表されるギリシア語パピルス史料との相互検証が可能になることを意味している。第二に、グラフィティの治世年を手がかりとすることで、細かい時系列上の変化を追うことが可能になる。これは、とりわけ在地社会の文化変容を考察する際に、グラフィティが考古学的証拠を補完する機能を果たしうることを意味している。第三に、これらの史料が採石場の壁面や天井面というコンテクストを伴っていることから、建築学的な知見と総合することによって、ギリシア人とエジプト人とのダイナミックな相互交渉の実態を浮き彫りにする可能性が拓ける。グラフィティの内容の分析はまだその緒についたばかりであるが、以上の諸点を勘案するならば、本研究成果とそのさらなる展開を通じて、プトレマイオス朝エジプト史の再構築に資する国際的にも貴重な展望が得られるであろうことは確実であろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 周藤芳幸「採石場のヘレニズム　−前３世紀エジプト領域部の文化変容をめぐって−」『名古屋大学文学部研究論集』史学編 57（2010）1-17 頁、査読無

② SUTO, Yoshiyuki　“Thebes and Middle Egypt in the Hellenistic Period: An Archaeological View,”　ORIENT　43 (2008), 93-106.　査読有

③ 周藤芳幸　「永遠なる叡智の結集　アレクサンドリア図書館」『季刊　大林』50 (2007) 42-51 頁、査読無

〔学会発表〕（計２件）

① SUTO, Yoshiyuki and TAKAHASHI, Ryosuke “Bilingual Graffiti from the Ptolemaic Quarries in Akoris and Zawiet al-Sultan,” 26th International Congress of Papyrology, University of Geneva, 20 August 2010.

② 周藤芳幸・高橋亮介「プトレマイオス朝エジプトの採石場遺跡と二言語併用グラフィティ」日本西洋史学会第 58 回大会、島根大学、2008 年 5 月 11 日

〔図書〕（計１件）

① 竹中克行・山辺規子・周藤芳幸（編）『朝倉世界地理講座　地中海ヨーロッパ』朝倉書店、2010 年

６．研究組織

(1)研究代表者

周藤　芳幸（SUTO YOSHIYUKI）

名古屋大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：70252202

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者　なし